

平成 23 年 6 月 10 日現在

機関番号：12606

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20720022

研究課題名 (和文) 国際ゴシック様式のフランス絵画—宮廷・工房・伝統

研究課題名 (英文) French Paintings in the time of the International Gothic Style:
Courts, ateliers and their tradition

研究代表者

高木 真喜子 (TAKAGI MAKIKO)

東京芸術大学美術学部芸術学科 助教

研究者番号：20463945

研究成果の概要 (和文)：本研究は、中世末期、国際ゴシック様式の時代におけるフランス写本絵画を主たる対象として、時代様式に対する地方様式の貢献という観点からアプローチすることにより、当該時代のフランス絵画の様相の把握に改めて取り組むものである。とりわけ〈ロアンの画家〉およびその工房の作品群に着目し、工房の伝統、宮廷のパトロネージの下での発展、その後の伝承について具体的に検証することにより、その一例を示すことができた。

研究成果の概要 (英文)：This study takes French manuscript paintings in the time of the International Gothic Style as main object of research, and is to research on contributions of the local art styles in France to the principal art style of the International Gothic.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史

キーワード：〈ロアンの画家〉、写本挿絵、国際ゴシック様式

1. 研究開始当初の背景

14 世紀末から 15 世紀にかけてヨーロッパ全域で開花していた国際ゴシック様式と呼ばれる美術様式は、中世末期から近代への移行期にあって、芸術のパトロンが教会から世俗の王侯貴族へと代る状況を反映した、優美で洗練された宮廷様式であった。また、国際様式の名称の通り、パリ、ディジョン、アヴィニオン、シエナ、プラハ、ケルンといった文化的中心となりえたヨーロッパ中の都市間の、相互の流動的な影響関係の下で展開したため、汎ヨーロッパ的な美術様式であったことも大きな特徴のひとつである。そのため、

フランス、イタリア、ボヘミアの各地の図像伝統や様式的特徴がひとつの作品の中に混在しているというような場合が多く、ある一都市の美術様式が他に対して優越的であるということはなかった。とは言え、中世の芸術がその終焉を迎え、近代の芸術に移行していく時代にあって、そうした網の目のような影響関係の水脈が集ってなした国際ゴシック様式という泉は、やがて初期ネーデルラントという大きな流れへと向かうことになる。

そうした中で、当然のことながらこの時代の芸術作品の研究は、その新しい時代の芸術様式の源泉として位置付けることのできる

作例を中心に進められてきた。

2. 研究の目的

本研究は、上記のような状況を踏まえ、これまでに総括的な考察対象とされてこなかった興味深い地方様式に着目し、初期ネーデルラントという大きな流れに合流しないとしても、その一定の合流や支流の過程を分析することによって、その美術史的な位置づけを提示することを目的としている。

とりわけ本研究の着眼点となった〈ロアンの画家〉および、この画家が途中から活動に参加したと思われる、シャンパーニュ地方のトロワに由来する工房の作例の画像表現や様式の出自と伝承について分析することを通して、これまで主要な研究対象とされてこなかった地方様式が美術史の流れに為した貢献を検討することにより、従来の研究からは見えてこなかった国際ゴシックの様相が浮き彫りにできるのではないかという点が、研究の出発点における目的である。

3. 研究の方法

(1) 資料収集・整理

1400年頃から1450年頃にかけてフランスで制作された写本挿絵の図版資料を、パリで制作されたすでに研究が進められている作例ではなく、地方一とは言え、パトロンとなりえる貴族の居城があるなど、文化的素養のある都市一で制作された作例に焦点を当てて収集する。

(2) 分析、研究

制作地により画像選択、画像表現、様式の特徴を分析する。そしてそれらの地方様式が、国際ゴシック様式という時代様式としての芸術様式にどのように貢献したのか、あるいはしなかったのかを分析することにより、その位置付けと美術史における意義について考察する。

4. 研究成果

(1) 資料収集・整理

〈ロアンの画家〉とその工房に関わる以下の写本について、入手可能な図版資料を収集し、データを整理した。図版と併せて基本データ（サイズ、フォリオ総数、制作年代、注文主、来歴等）および、当該作例に言及している文献一覧、先行研究における言及等の情報を入力したが、基本データについては不明なものも多く、今後の課題として残されている。

また、1冊の中に多数の挿絵が施されている写本作例について、すべての挿絵を把握することができず部分的な収集に留まっているものもある。

近年、写本作品を所蔵する欧米の図書館のデータベース化が進んでいるため、この作業

は今後も継続し、資料として充実させていく予定である。

① 〈ロアンの画家〉の工房に関連づけられる時禱書作例、およびシャンパーニュ地方で制作されたその他の時禱書作例

《時禱書》、パリ、サント・ジュヌヴィエーヴ図書館、ms. 1278 / 《時禱書》、パリ、アルスナル図書館、ms. 647 / 《時禱書》、パリ、装飾美術館、Inv. 40342 / 《時禱書》、シャンティイ、コンデ美術館、ms. 67 / 《時禱書》、アミアン、市立図書館、ms. Lescalopier 17A / 《ミサ典書》、サンス、市立図書館、ms. 18 / 《時禱書》 ロンドン、大英図書館、ms. Harley 2934 / 《時禱書》、ロンドン、大英図書館、ms. Harley 2940 / 《時禱書》、プリンストン、大学図書館、Garrett ms. 48 / 《時禱書》、ケンブリッジ（マサチューセッツ）、ハーバード・カレッジ図書館、Richardson ms. 42 / 《時禱書》、パリ、フランス国立図書館、ms. lat. 864 / 《時禱書》、パリ、フランス国立図書館、ms. lat. 924 / 《時禱書》、シャロン・アン・シャンパーニュ、市立図書館、ms. 22 ; 《ジアックの時禱書》 トロント、ロイヤル・オンタリオ博物館、ms. 997.158.14

② アンジュー家の人物の注文により制作されたと考えられる時禱書

《ロアンの大時禱書》、パリ、フランス国立図書館、ms. lat. 9471 / 《ルネ・ダンジューの時禱書》、パリ、フランス国立図書館、ms. lat. 1156A / 《時禱書》、リヨン、市立図書館、ms. 5140 / 《イザベル・スチュアートの時禱書》、ケンブリッジ、フィッツウィリアム美術館、ms. 62

③ 〈ロアンの画家〉および工房の影響が見られる、15世紀中頃にブルターニュで制作された時禱書作例

《カトリーヌ・ド・ロアンとフランソワーズ・ド・ディナンの時禱書》、レンヌ、市立図書館、ms. 34 / 《ジャン・ド・モンターバンの時禱書》、パリ、フランス国立図書館、ms. lat. 18026 / 《ジャン・ド・モンターバンの時禱書》、レンヌ、市立図書館、ms. 1834 / 《マルグリット・ドルレアンの時禱書》、パリ、フランス国立図書館、ms. lat. 1156B

(2) 収集資料に基づく研究成果（以下の丸囲み番号は、上記「4. 研究成果 (1) 資料収集・整理」欄の同番号に対応）

① 〈ロアンの画家〉の画家が属していた、あるいは共同制作を行った工房は、シャンパーニュ地方の都市トロワにおいて活動しており、後にパリもしくはアンジューに移ったと見做されている。そして、おそらくはパリ・アンジューでの活動期以降に制作に関与した〈ロ

アンの画家)の、特異な様式や独特の図像表現のイメージ・ソースの重要なファクターとなったこの工房の初期作例において、フランスではなくドイツやボヘミア地方の伝統に基づく図像表現が見出されることが指摘されている。先行研究において指摘されているのは、「キリストの磔刑」に見られる図像表現であるが、本研究において「三位一体」図像についても同様の現象が見られることを新たに分析した。

「三位一体」は、時禱書の「三位一体への礼拝」のテキストに施される挿絵としてよく選ばれる図像であり、その図像表現には次のようなタイプが見られる。第1に、いわゆる「恩寵の御座」と呼ばれる図像で、玉座に座した父なる神が、腕に抱えられる程の大きさの十字架に架けられたキリストを膝に抱き、両者の間に聖霊の鳩が配されている。第2に、老年の男性像として表わされた父なる神と、壮年の男性像で表わされた子なるキリストが並んで座し、両者の間に聖霊の鳩が配される図像である。《ロアンの大時禱書》の「三位一体」は、ケルビムの軍勢に取り囲まれた半身像の神が幼子の姿で表わされたキリストと聖霊の鳩とを抱いているという、あらゆる点において特殊なものであるが、父なる神が抱えているキリストが幼子として描かれているという点については、トロワで制作された写本挿絵に前例があることが指摘されている。また本研究の期間中に開催された『Très riches heures de Champagne: L'enluminure en Champagne à la fin du Moyen Âge (シャンパーニュのいとも豪華なる時禱書—中世末期におけるシャンパーニュの写本装飾)』展に展示された、シャロンで制作された時禱書に同様の図像が見られた。

筆者は、先行研究に挙げられた「磔刑」のモチーフについて、ウィーンの聖シュテファン大聖堂内陣のステインドグラスに先行作例を見出していたため、「三位一体」についても同様の検討を行ったところ、マールブルクの聖エリザベス教会のステインドグラスにキリストを幼子の姿で表す同タイプの図像を見出すことができた。つまり、〈ロアンの画家〉工房に知られていたドイツ・ボヘミア地方に由来すると思われる図像は、同時代のドイツ・ボヘミアの作例に特徴的に見られる図像表現であったというよりもむしろ、より広範な視点から見た図像伝統というものを念頭に置くべきものである可能性がある。この問題については、本研究の課題から離れた「三位一体」の図像研究に展開するかもしれないが、更なる研究を重ねた上で成果としてまとめたいと考えている。

② 〈ロアンの画家〉とその工房は、《ロアン

の時禱書》を始め、アンジュー家の人物のための時禱書を複数制作している。《ロアンの大時禱書》の注文主はフランス国王シャルル6世(在位1380-1422)の従兄弟アンジュー公ルイ2世の妃ヨランド・ダラゴンとする説が定着しつつあり、《ルネ・ダンジューの時禱書》は、その息子ルネのものであった。また《イザベル・スチュアートの時禱書》についても、現在の呼称にあるブルターニュ公フランソワ1世の2番目の妃イザベル・スチュアートは後の所有者であり、本来は最初の妻であったルイ2世とヨランド・ダラゴンの娘のために制作されたと考えられている。

聖職者がミサで使用するものではなく個人用の祈禱書であった時禱書は、当時、その注文主となりうる裕福な王侯貴族のために数多く制作されていた。とりわけフランス国王シャルル5世の王弟ベリー公ジャンは蒐集家であっただけでなく優れた審美眼を持つパトロンとして有名であり、彼のパトロネージュの下でジャン・ル・ノアール、ジャックマル・ド・エダン、そしてランブール兄弟といった当時を代表する画家たちが写本制作を行い、それはそのまま国際ゴシック様式のフランス写本絵画の最先端の発展史を形成していると見做すことができる。それは洗練された優美な宮廷様式であり、また自然主義的な空間表現という点において、初期ネーデルラント絵画の源泉となりうるものであった。

〈ロアンの画家〉と工房の画家たちがアンジュー家のパトロネージュの下で制作活動を行っていたと考えられる時期は、ランブール兄弟はすでに死去した後であるが、パリでは〈ブスコの画家〉や〈ベッドフォードの画家〉の工房において国際ゴシックらしい優美な時禱書は盛んに制作されていたと思われる。従って、アンジュー家のパトロンたちは、好んで〈ロアンの画家〉およびその工房の画家たちの作品を所有したということになる。それは、パリの洗練された様式ではなく、表現主義的な激しい造形、時に粗野に見えるほどの顔貌表現といった〈ロアンの画家〉の特異な様式が、単純にこの宮廷の人物たちの趣味に合っていたということであるのか？本研究では、アンジュー家のパトロネージュの下で制作活動を行っていたこの時期に、おそらくは〈ロアンの画家〉の登場とも相俟って、工房の様式、図像表現が大きく変貌、発展したことを具体的に論証し、最後の審判、それと結びついた個人の死後の私審判を強く意識させる図像表現、それを表すための特異な様式が、単純な趣向としてではなく、パトロンたちにとって切実な表現であったことを示した。

そのことは、時禱書という書物に限らない、当時のアンジュー宮廷の文化的な背景と結びついていると更に興味深いのが、本研究の範

囲ではそこまで検討することができなかった。しかしこの問題について、筆者の所属機関の研究者が世俗テキストの写本である《狩猟の書》を対象として同時代の写本研究を行っているのだが、興味深いことに、アンジュー家のために制作された《狩猟の書》に関する研究過程には、筆者がここに行った時禱書研究の並行現象とも解釈できるような考察を見ることができる。この現象のみから“Anjou trend”と呼びうるような美術的動向を想定することはできないが、今後の研究テーマとして検討したいと考えている。

③こうしてアンジュー家の宮廷の下で飛躍を見せた〈ロアンの画家〉と工房の作例の影響は、後のブルターニュで制作された時禱書の挿絵に見出すことができる。これまで、それらの作例に見られる、《ロアンの大時禱書》とのモチーフの類似について単発的に言及されることはあったが、本研究では《ロアンの時禱書》の「審判者の前の死者」とブルターニュで制作された《ジャン・ド・モンターバンの時禱書》の「審判者・天使と悪魔の闘い」の挿絵の類似に着目し、両者の間にはモチーフ単位の模倣だけでなく、特徴的な図像コンセプトも共通していることを指摘した。（『《ロアンの大時禱書》「審判者の前の死者」——中世末期の時禱書における最後の審判と私審判』、『ルクス・アルティウム 越宏一先生退任記念論文集』所収、中央公論美術出版、2010；『〈ロアンの画家〉とその工房——図像表現およびモチーフの出自と伝承に関する考察』、『東京藝術大学美術学部紀要』、第48号、2011刊行予定）

《ロアンの大時禱書》および《イザベル・スチュアートの時禱書》は、制作後間もない時期に、戦争捕虜の身代金の一部として、あるいは婚姻を通じてブルターニュ公国にもたらされた可能性が高いと考えられている。その頃ブルターニュで制作された複数の時禱書にその図像やモチーフが伝承していることはその説と一致するが、本研究では、工房の活動の場もブルターニュに移行した可能性も提示された。もともと、そのように考えた場合、〈ロアンの画家〉工房が去った後のアンジュー家の宮廷においては、バルテルミー・デックなどの芸術家が活躍しており、〈ロアンの画家〉工房はアンジュー家のパトロネージを失ったために移動したと解釈するべきかもしれない。しかしその一方で、その独自の図像表現や様式の影響を受けた作品群がブルターニュ公周辺において生み出されることになった見做すこともできるのではないだろうか。そして、シャンパーニュからアンジュー宮廷、ブルターニュへと、造形的なコンセプトを共有しつつ様相を変えて流れていったその様式は、華麗な国際ゴ

シック様式の芸術作品にはまるで反映されていないように思われる現実の社会背景——100年戦争による疲弊や伝染病の流行——と一致するかのような様相を呈している。本研究の出発点であった、時代様式への貢献という視点に改めて立ち返るなら、それは大きな流れに対して何らかの働きかけをするのではなく、主たる時代様式が表さなかった側面を補うような位置付けにあると見做すことができるのではないだろうか。優美な宮廷様式と、死や審判を想起させる表現主義的様式、双方があってこそ中世末期の芸術様式である国際ゴシックの全体像が形成されるのである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

①高木真喜子、「《ロアンの大時禱書》「審判者の前の死者」——中世末期の時禱書における最後の審判と私審判』、『ルクス・アルティウム 越宏一先生退任記念論文集』所収、中央公論美術出版、2010、pp. 122-132（査読なし）

②高木真喜子、「〈ロアンの画家〉とその工房——図像表現およびモチーフの出自と伝承に関する考察』、『東京藝術大学美術学部紀要』、第48号、2011（刊行予定）（査読有）

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕

高木真喜子、「中世の写本画——時禱書の世界』、『輝く書物——中世写本ファクシミリ選——』（東京藝術大学附属図書館所蔵貴重資料展パンフレット）所収、2008

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高木真喜子 (TAKAGI MAKIKO)
東京藝術大学・美術学部芸術学科・助教
研究者番号：20463945

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者